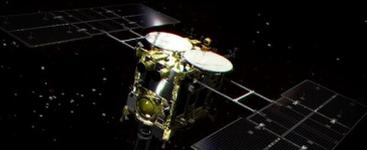


The 14th APCC (Asia-Pacific Physics Conference)

第14回 アジア太平洋地域 物理学会議

開催期間: 2019年11月17日～22日

開催地: マレーシア国サラワク州クチン市、ボルネオ・コンベンションセンター



東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構
連携研究員 牧島一夫

私は今回、貴振興会の援助を頂き、標記会議に参加し招待講演を行った。この APCCとは、アジア太平洋地域の物理学会(17団体)の連合組織である AAPS (Association of Asia Pacific Physical Societies) が3年ごとに開催する大規模な国際会議で、宇宙物理学を含む物理学の広汎な研究分野において、各国で選りすぐった研究成果を持ち寄り発表する場である。2013年には千葉県幕張、2016年にはブリスベンで開かれ、第14回目の今年にはマレーシア・ボルネオ島サラワク州クチン市の郊外にある立派な Borneo Convention Centerで開催された。日本からの参加者も、若手からシニアまで多数であった。17日午後は受付(市内ホテルにて)があり、18日の朝には大々的な開会式が執り行われ、東京大ビッグバンセンターの横山順一教授が次期 AAPSの会長に選ばれた。

私は今回「Astrophysics, Cosmology, and Gravitation」分科会において、招待講演者の一人として18日の午前に30分の招待講演を行い(写真1)、19日午後には座長を務めた。講演内容は、私と数名の共同研究者が5年ほど推進してきた研究に関するもので、「すざく」衛星および米国 NuSTAR 衛星によるX線観測を通じて、中性子星のうち特に強い磁場をもつとされる「マグネター天体」の3例から世界で初めて、自由歳差運動を検出したというものである。これは中性子星の内部に潜む強烈なトロイダル磁場により、中性子星がわずかに縦長に変形した結果と解釈でき、外部からの直接検出が難しいトロイダル磁場を推定する全く新しい方法として、またマグネターが間違いなく強烈な磁場をもつことの証拠の1つとして、参加者に高い評価をいただいた。会議の運営はスムーズで、私自身も様々な新しい研究成果を知ることができ、20日のバンケット(写真2:市内ホテルにて)も賑やかに行われた。

今回は「ボルネオってどんな所だろう」と期待しつつ参加した。クチンは現地語で「猫」を意味するそうで、街には猫のオブジェや本物の猫も多い。日中は30°Cを越えるが、治安は極めて良く、物価は安く、英語は良く通じ、食べ物はどれも美味しく、お腹を壊すこともなく、文化的にも自然景観にも見所が多かった。日没後は街を貫くサラワク川に沿って電飾が輝き、人々が熱帯の夜を楽しむなど、たいへん魅力的で居心地の良い街だった(写真3)。赤道直下のため、暮れ方の西空には金星と土星が上下に並び、高台にあるホテル自室から東の夜空を眺めると、真横に倒れたオリオン座が昇り、ついで全天で最も明るい恒星シリウスと2番目に明るいカノープス(日本からは見えない)が揃って昇って来たのは感動的だった。

この地域にはマレー系(イスラム教)、中華系(仏教)、インド系(ヒンドゥー教)、英国植民地文化(キリスト教)など、異なる分化が重層的に共存し、それが社会の厚み・緊張感・人間の中核規範などの源となっているという印象をもった。単一文化的で寛容度が少なく、多様な価値観を折り合わせることを苦手とする日本に比べ、これは大きな強みであり、アジア太平洋地域での研究協力の重要性を実感するなど、学ぶところ多大であった。これも振興会のご支援のお蔭と、お礼を申し上げる。



写真1: ボルネオ・コンベンションセンターでのセッションで講演する牧島。



写真2: 市内ホテルでのバンケット。伝統的な民族舞踊の踊り手たちに誘われ参加者も踊った。左端が牧島、右から3人目が開催責任者のKuru教授。



写真3: 夕暮れのクチン市郊外。サラワク川に夕焼けが映え、熱帯の積乱雲の中では時おり雷光が輝く。